

長野市松原遺跡出土の「杏葉轡」について

上田 典男

はじめに

松原遺跡では、全体形状がわかる轡が3点出土している。2点は後期古墳からの出土で、1点は古代の土坑から出土したものである。後者の轡は、今まで目にすることがない形態で、名称も含め実測方法等、どのように扱えばよいのか難渋していた。『日本馬具大鑑』第三巻所収の片山寛明氏の論文中に類例を見出すことができ、今回報告する轡の資料価値をあらためて認識した次第である。

片山氏によれば、「杏葉轡」は鎌倉時代を代表する「和式轡」で、「平安時代の現存作例は知られないが、『伴大納言絵巻』や『平治物語絵巻』『後三年合戦絵巻』などに頻繁に見ることができる」とし、その初源を平安時代に求めている。さらに片山氏は、「杏葉轡」を鏡板の形状から、以下の3種に分類している。

- (一) 幅広の多頭形をなしたもの。鏡板のやや内側を、稜線の凹凸に沿って切り抜き、底部から中央に張り出した稜線に相似した多頭形に喰先を絡めるもの（第1図）
- (二) 三つの山形を持つもの。鏡板の中央に三頭葉状の突起を、鏡の稜線に沿って切り透かし、これに喰先を絡めるもの（第2図）
- (三) 逆ハート形の下の窪みを大きくX字状に交わせ、これに喰先を絡めるもの

松原遺跡の轡は(三)に相当し、類例として提示された長野県小諸徴古館所蔵例に構造的にも極めて類似するものである（第3図）。また、『小諸市誌 考古篇』で紹介されている「懐古神社蔵の轡」も同様の事例として上げられる（第4図）。いずれにせよ、本例は時代が特定できるという点でも、重要な位置を占めるものと考え、報告書刊行前に報告することとした。

松原遺跡出土の「杏葉轡」

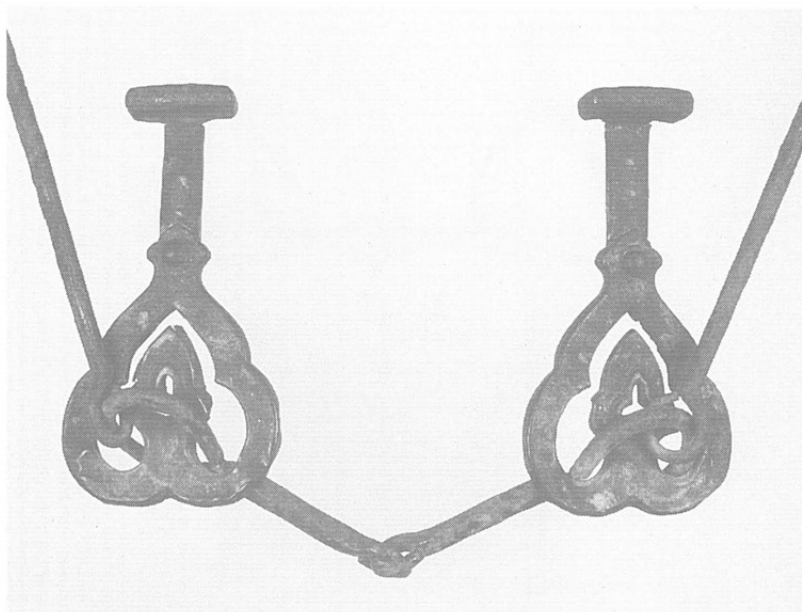
松原遺跡は、長野市松代町東寺尾に所在する縄文時代から中世及び近世に至るまでの複合遺跡で、古代においては、堅穴住居址が約400軒検出されるなど、長野盆地でも屈指の大集落址として位置付けられる（第5図）。また、松代地区は「英多郷・英多荘」の比定地でもあり、そうした面からも注目される遺跡である。今回報告する「杏葉轡」は、9世紀代の堅穴住居址が分布する調査区南端部の居住域に位置する土坑（SK19）から出土した。

1. 「杏葉轡」を出土した土坑の性格と時期

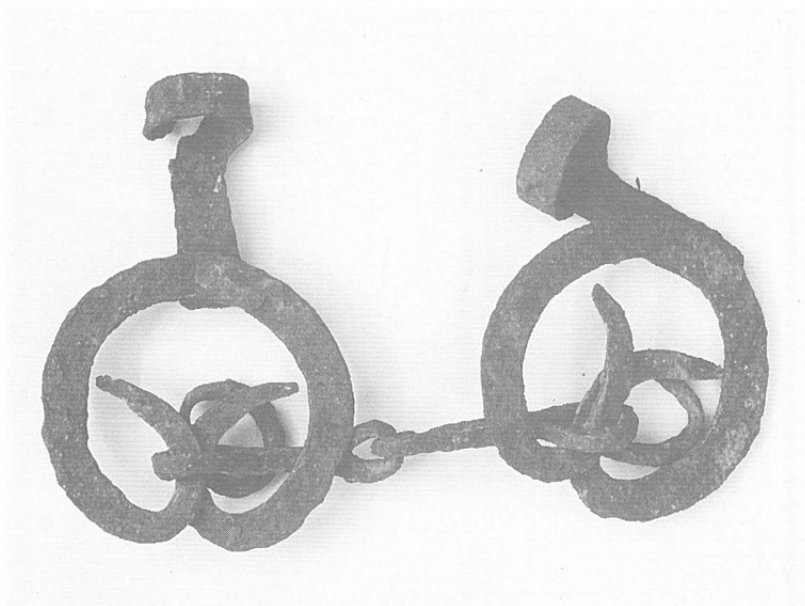
SK19は、径85cmの円形土坑で、深さは15cmを測る。断面形は鍋底状で、覆土は単一土層であるが、底面に焼土ブロックを混入する。すぐ隣に平面形は方形と異なるものの、覆土の状況・



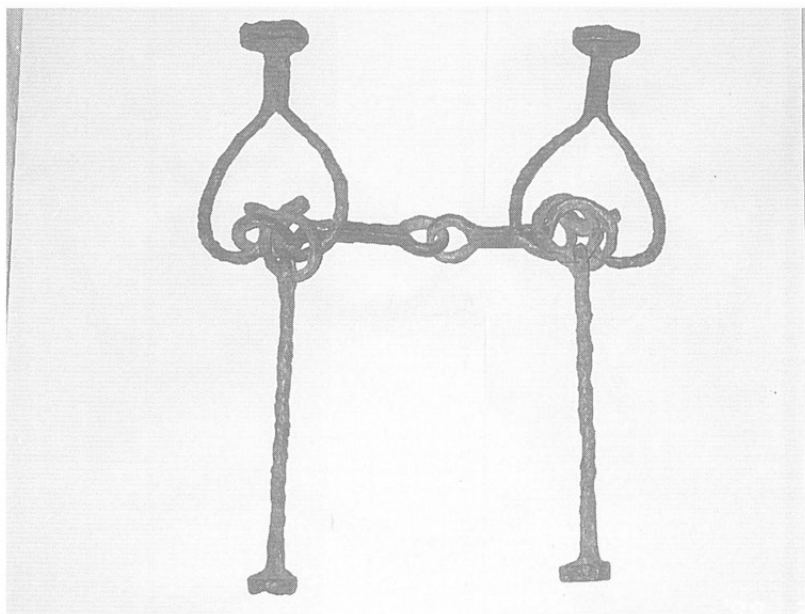
第1図 杏葉轡 伴大納言絵詞（『日本の絵巻』2 中央公論社 より）



第2図 杏葉轡（高津古文化会館蔵）（『日本馬具大鑑』二古代下 より）



第3図 小諸市懐古神社（徴古館）所蔵 杏葉轡（『日本馬具大鑑』三中世 より）



第4図 小諸市懐古神社（徴古館）所蔵 杏葉轡（『小諸市誌』より）

焼土ブロックが混入することなど、類似する土坑(SK18)が位置している(第7図)。両者とも坑内で火が使用された痕跡は認められないこと、単一土層でありながら底面に焼土ブロックないしは焼土堆積が見られることなどから、短時間のうちに人為的に埋め戻されたことが推測される。これは、両者が開口状態ではなく埋没状態を保つこと、あるいは埋め戻す行為自体に土坑の機能があったことを意味しているのではなかろうか。「杏葉轡」はこうした土坑から出土したものである。したがって、「杏葉轡」自体が、単独か複数(組み合わせ)かは別として、土坑機能の対象物となっていたことが予想される。

しかしながら、その詳細な出土状況は、残念ながら記録に残されておらず、伴出した土器片とともに土坑覆土一括遺物として取り上げられている。土器は、土師器の小形甕(底部手持ちヘラ削り)・須恵器杯(底部回転糸切り)・須恵器高台付き杯などで、個々及び総体から9世紀前半と想定される。したがって、SK19の時期についても同時期に比定され、「杏葉轡」に関しても、9世紀前半が下限の時期として設定できる。また、周囲に分布する8軒の竪穴住居地の時期も、9世紀以前が1軒、9世紀前半が5軒、9世紀後半が2軒で、遺構配置の面から言っても妥当性のある時期と言えよう(第7図)。

2. 「杏葉轡」

今回報告する資料は、欠損する部位はあるものの、その全容はほぼ明らかにすることができ鉄製の轡である(第8図・巻頭写真2)。

「鏡」は、丸みを帯びた逆ハート形で、素材の先端部がX字状に接するように鍛造されている。これは、『日本馬具大鑑』第三巻で紹介されている小諸徴古館所蔵資料に相似する形状で、本資料を「杏葉轡」とした由縁である。

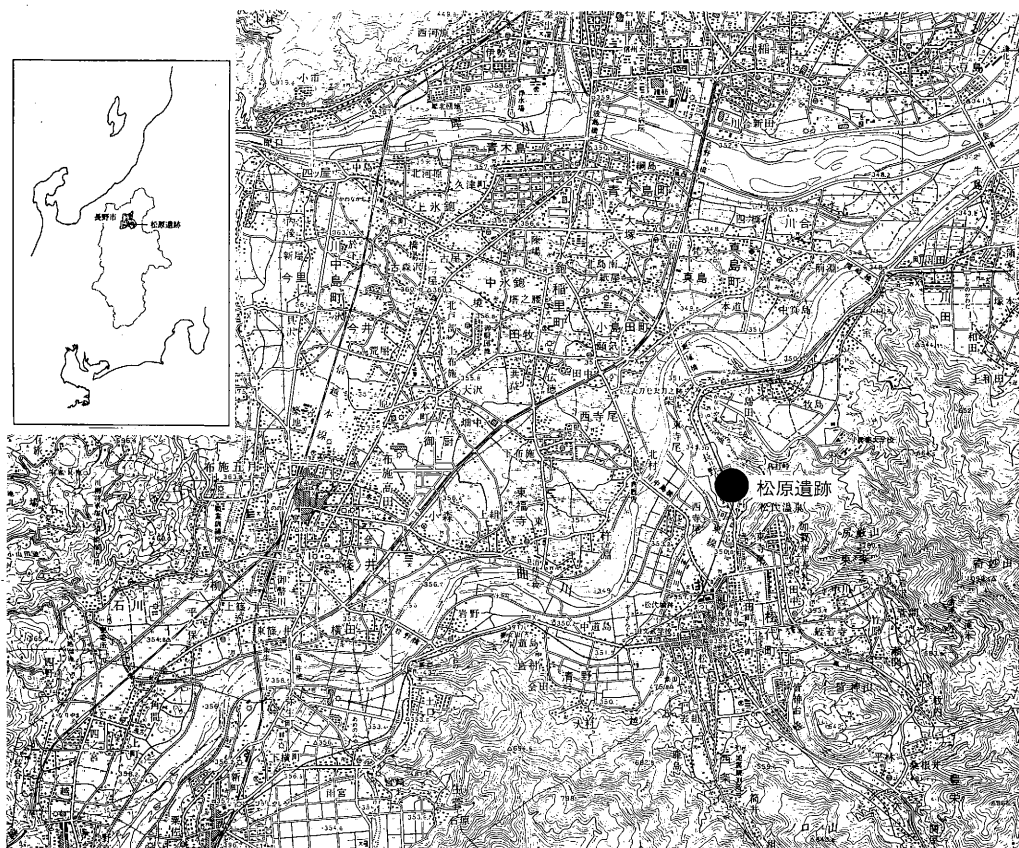
「立聞」は、端部を折り返すことで「鏡」と連結させ、一方の端部をねじ曲げて「立聞壺」を形成している。「鏡」との連結部、即ち折り返し部に鋌打ちなどの痕跡は認められない。

「喰」は二連で、「喰先」に「遊金」を通し「引手」と連結させている。また、「鏡」との連結に関しては、字状の部分に残る「遊金」の存在から、「引手」との連結同様に「遊金」が介在していたことが指摘できよう。

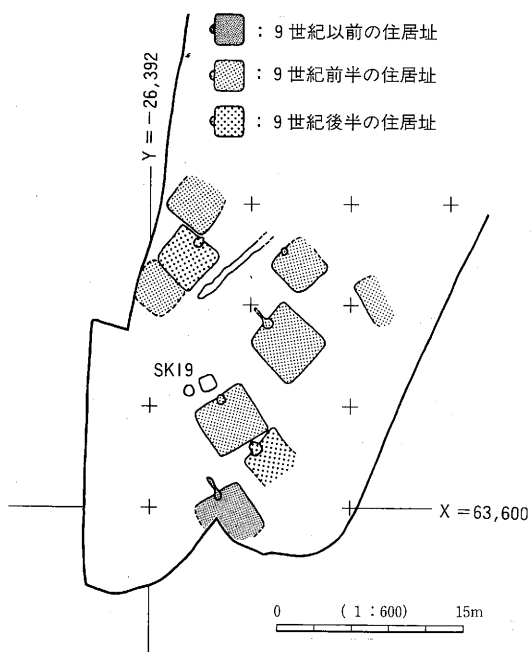
「引手」の端部は、「喰先」との連結部とは異なり、「立聞壺」と同様な製作技法で「引手壺」が形成されている。

以上、部位ごとに概略を記した。「鏡」と「立聞」が別造りで、両者を連結させる本資料は、片山氏が『日本馬具大鑑』第三巻で紹介された小諸徴古館所蔵資料と同様で、文献を見るかぎり両者を一つの素材から造り出す「大和国東大寺若宮八幡宮蔵鞍並皆具図」の中の轡(『集古十種』)・小諸懐古神社所蔵資料とは異なっている。こうした差異がどのような意味をもつかは計りかねるが、片山氏の分類(三)の中に、少なくとも二つのタイプが存在することが指摘できる。

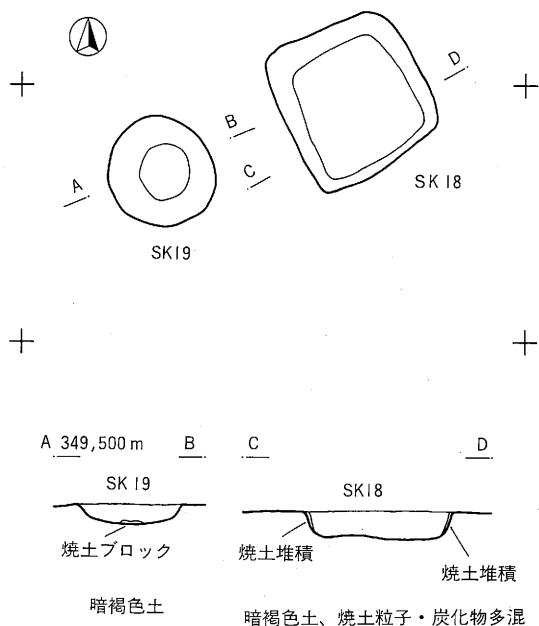
また、本資料を「杏葉轡」とした「鏡」の形状もさることながら、「立聞」と「面懸」、「引手」と「手綱」の両連結部がそれぞれ「立聞壺」・「引手壺」となっている点にも注目しておきたい。松原遺跡でも後期古墳から素環状鏡板付轡が2点出土しているが、いずれも「引手」先端部に角度を持たせているものの、「立聞」を含め隔絶の感は否めない。それに対して、『伴大納言絵



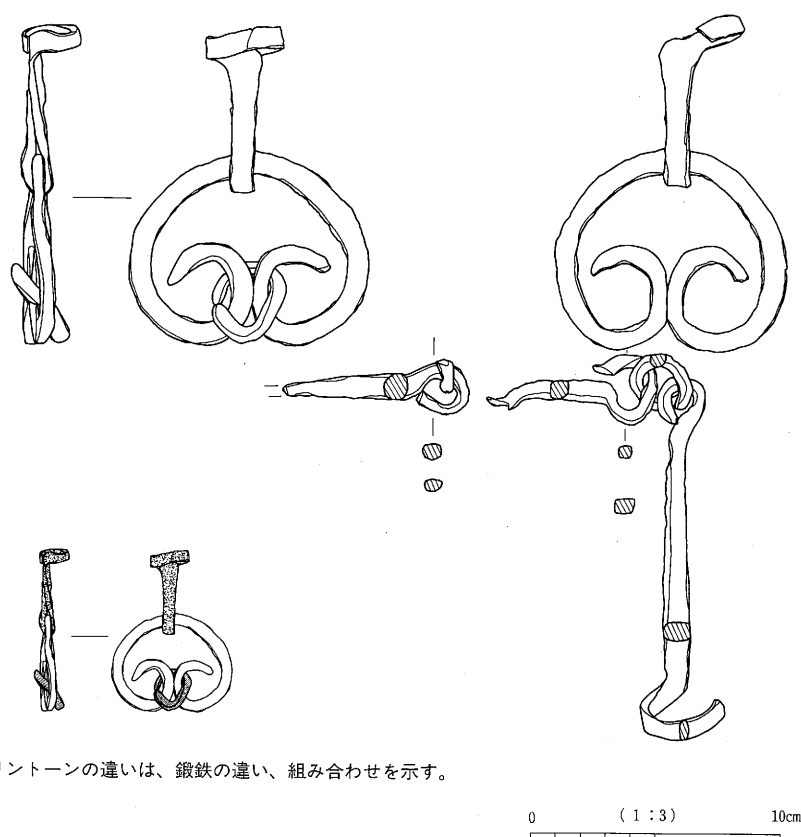
第5図 松原遺跡の位置 (1:100,000)



第6図 遺構分布図



第7図 SK18・19遺構図 (1:60)



第8図 松原遺跡出土 杏葉轡実測図

詞』など12世紀以降に製作された絵巻物に描かれている轡は、「鏡」の形状は数種類に分類されようが、いずれも明確な形で「立聞壺」が描かれている。本資料を9世紀前半に位置付けたことで、そうした変化が7世紀から8世紀の間の時期に顕在化したことが指摘できよう。「立聞壺」が出現することで、轡の機能的側面等にどれほどの変革があったかについては不明と言わざるを得ない状況であるが、それ以降「立聞」には「立聞壺」が付随するという型式が保持されることとなる。こうした言わば型式の変化は、同じ馬具の中でも、8世紀以降に「舌鐙」が出現するという「鐙」にも見出すことができる（永井1996）。したがって、古墳時代から中世への連なる馬具一般の変遷の中で、7世紀から8世紀という時期に大きな画期があったことが予想される。本資料は、そうした流れの中で、一つの定点を定めたという意味においても、資料的意義は大きい。

おわりに

これまで述べた以外に、「遊金」の存在が問題点の一つとしてあげられる。本資料では、「鏡」・

「喰」・「引手」の連結にそれぞれ「遊金」が用いられているのに対して、鎌倉時代以降の現存する「杏葉轡」には、「遊金」は採用されていない。細かいことかもしれないが、こうした差異が何に起因するのか。系統性を含めた時代的な特性なのか、馬の使用目的の差によるものなのか、はたまた、乗馬方法の変化によるものなのかなどと興味は尽きない。資料的な制約から、古墳時代から古代へと通して系統的に研究されることの少なかった研究分野の一つであったが、今回の資料報告が契機となり、研究が活発化することを期待するものである。なお、本稿は、『日本馬具大鑑』並びに同書所収の片山氏の論文に拠るところが大きいことをつけ加えておく。

浅学の筆者が一文をなし得たのも、下記の方々の暖かいご指導とご協力の賜物である。ご芳名を記して謝意を表する次第です。

青木一男 赤羽啓子 黒岩美枝 風間春芳 小林秀夫 白沢勝彦 賛田明 西村はるみ

参考文献

- 片山寛明 1987 「日本の轡」『馬の博物館研究紀要』1号 根岸競馬記念公苑
 片山寛明 1990 「和式轡の展開」『日本馬具大鑑』第三卷中世 日本中央競馬会
 片山寛明 1992 「鐙の構造からみた武士の馬術の特色」『馬の博物館研究紀要』5号
 北佐久郡志編纂会 1956 『北佐久郡志 第二巻歴史篇』
 小松茂美編 1987 「伴大納言絵詞」『日本の絵巻』2 中央公論社
 小諸市誌編纂委員会 1974 『小諸市誌 考古篇』
 永井宏幸 1996 「古代木製鐙小考」『古代』102号 早稲田大学考古学会
 日本馬具大鑑編集委員会 1990 『日本馬具大鑑』第三卷中世 日本中央競馬会
 日本馬具大鑑編集委員会 1990 『日本馬具大鑑』第一卷古代上 日本中央競馬会
 日本馬具大鑑編集委員会 1991 『日本馬具大鑑』第二卷古代下 日本中央競馬会
 松平定信編 寛政12年(1800) 『集古十種』(国書刊行会本)

付記 脱稿後、小諸市教育委員会の花岡弘氏に便宜を図っていただき、『日本馬具大鑑』所収の小諸市徴古館所蔵例及び『小諸市誌』所収の小諸市懐古神社所蔵例を実見する機会を得ることができた。加えて、宗教法人懐古神社牧野一郎会長、徴古館小山恒雄館長のご配慮により、上記2例の観察・実測・写真撮影等を実施することができた。2例とも本資料とは製作技法が異なっており、前者は「鏡」と「立聞」を鋳だめで連結させており、後者は「鏡」から「立聞」まで一つの素材で作出し、「立聞壺」のみを別作りとしている。いずれも製作年代については不明と言わざるを得ないが、前者については、その文体から江戸時代後期と推定される所謂鑑定書が付随しており、それによると保元の頃(1156～1158)の所産とされている。いずれにしても、製作技法の異なる三者三様の「杏葉轡」が、信濃国(長野県内)というある意味で限定された地域に現存している点に注目しておきたい。また、こうした差異が、単に、年代差によるものか否か、製作技術の問題も含めて今後の課題としておきたい。